

# 図書館報 ぷらっつ★篠崎

046号

イベント  
レポート

## ブラインドサッカーを知ろう～現役選手に聞くブラサカの魅力～

去る12月13日に講演会「ブラインドサッカーを知ろう～現役選手に聞くブラサカの魅力～」を開催しました。ブラインドサッカー（以下ブラサカ）とは、アイマスクをつけてボールの音とまわりの声を聞いて行う5人制サッカーです。パラリンピック競技でもあります。今回講師を務めていただいたよしはら しげお 葎原滋男さんは、ブラサカチーム「乃木坂ナイツ」の代表であり、現役の選手でもいらっしやいます。パラリンピックで走り高跳び、自転車競技でメダルを受賞された経験をお持ちのスーパーアスリートです。会場ではブラサカ関連図書のほか、葎原さんのご厚意により、パラリンピックで受賞された金・銀・銅メダルを展示させていただきました。

講演会では葎原さんがパラリンピックでメダルを受賞されたときや、ブラサカ日本代表として出場した国際大会で決めたハットトリックの映像を上映しました。また葎原さんのブラサカ歴や日本における競技の歴史、ルールなどについてお話いただきました。視覚障害者のスポーツは安全確保の面から接触の少ない競技が主であり、接触の多いブラサカは異色なのだろう

です。また、視覚障害者の置かれている読書環境について必要な情報が必ずしも届いているわけではない現状などをお話いただきました。

講演後はご来場いただいた方々にもアイマスクをした状態で歩くところから、パス、ドリブルなどボールを使ったプレーを体験していただきました。葎原さんの気さくなお人柄もあってか、室内はアットホームなムードに。ボールの場所がわからなくなった人に皆で声を掛け合うなど、自然とコミュニケーションする雰囲気生まれました。これもまたブラサカの魅力の一つです。メディアからの注目度も高く、今後ますます広まっていこうブラインドサッカー。その魅力から目が離せません。



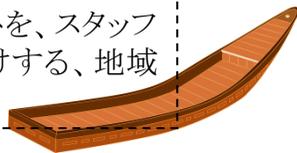
## 江戸川まいにんぐ 発掘 第46回 「河原の渡し」

今も昔も川に囲まれている江戸川区。遡ること千年も昔から渡し舟があったことが確認されています。江戸時代には幕府の政策により、江戸川・中川の両川では橋をかけることが許されておらず、川を渡るには渡し舟によるほかありませんでした。

篠崎にも昔いくつかの渡しがありました。中でも一番古いといわれるのが戦国時代からあったともいわれる「河原の渡し」。今の篠崎水門と王子製紙工場の中間あたりから向かい岸の行徳の河原村に通じていました。行徳でとれた塩を、岩槻に送るといって岩槻街道の起点であったとも考えられています。

『新編武蔵風土記稿』の伊勢屋村の項には「江戸川、村の東を流る、幅百間許、渡船場あり、河原渡しと云、川の向は下総國河原村なればかく唱へり、(後略)」とあり、当時の河原の渡しの川幅がおよそ180mあった事がうかがえます。(現在はおおよそ160～170mくらい) また『宇田川家文書』の「利根川渡越之

江戸川区内のイベントやスポットを、スタッフが調査して身近な情報をお届けする、地域密着型のコーナーです。



儀ニ付書上候控写」には「近郷之樵夫、草薙、耕作人之外一切川向江不可越之所付別紙ニ有(後略)」などとあり、やはり江戸時代に入ると、小岩・市川の関所の抜け道となるため、旅人の往来は厳しく禁じられ、百姓だけの渡しになった様子がわかります。

明治以降、逆井橋(明治19年)を初めとして徐々に橋が架けられ年々渡し舟は減りましたが、最後まで残った「三太の渡し」(東篠崎町～行徳町)のように、時代の流れとは逆に明治12年に新しく開設されたところもあったようです。お客から声がかかると舟を出し、あるいは対岸からのお客の呼び声に舟を寄せ、通勤や買い物客らを乗せていくのは風情のある光景でしたが、残念ながら昭和43年にすべて姿を消しました。当時の料金は人が20円・自転車30円・リヤカー40円。水門から迂回しながら、今も渡しがあったなら行徳まですぐ行けるのになあ……などと思わなくもありません。

『江戸川区史第1・3巻』

江戸川区区史編纂室編

江戸川区 K1-21-1・3

篠崎ほか所蔵

参考資料 『古文書にみる江戸時代の村とくらし2』

江戸川区教育委員会社会教育課文化財係編

江戸川区 K1-38-2

篠崎ほか所蔵

『行徳郷土史事典』

鈴木 和明著

文芸社 K4-21

篠崎ほか所蔵



人物ブックマークとは、著名人とその著作および関連本を紹介するコーナーです。

### 第34葉 平賀源内

平賀源内は享保13(1728)年、高松藩の米蔵番の三男として生まれた。名は国倫(くにとも)、源内は通称である。12歳の時、お神酒を供えると天神さまが顔を赤らめるからくりの掛け軸を作って人を驚かせるなど、その英才ぶりは早くから人びとに注目された。22歳の時、父が没し家督を相続。25歳の時、最初の長崎遊学を果たす。当時の長崎は鎖国中の日本にとって唯一、海外の文化に接する窓口であった。一年間の滞在中に何を学びどんな体験をしたか記録は残されていないが、異文化との接触によって大いに刺激を受けたことは想像に難くない。長崎遊学から帰った源内は家督を妹婿に譲り、藩へ辞職願を出し、いよいよ江戸へ向かうのである。

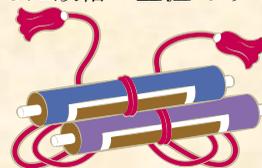
江戸へ出た源内は、高名な本草学者の元で本草学を研究すると同時に、湯島聖堂で儒学も学ぶなど意欲的に学問

をした。再び高松藩に召し抱えられると、次第に藩の業務に忙殺されていったようだ。江戸に出て5年目、34歳の時再び藩に辞職願を出し受理されるが、他藩への士官を禁じられ浪人となってしまう。

藩を離れてからも源内は多忙な日々を送る。火浣布(石綿で織った布)や毛織物の製作、エレキテルの復元を成功させ、鉱山開発に乗り出し、執筆活動を行い、油絵を描くなど、様々なことに手を出した。

好奇心旺盛で新しい物好き、そんな源内は有り余る才能を持ちながら、最後は建築工事の請負にからむトラブルが元で誤って人を殺め、獄中で病死する。古くからの友人であった杉田玄白が残した源内の碑文にある「非常ノ人」という言葉通り、尋常でない才を持ち、他人のなし得なかったことを行い、通常でない亡くなり方をした破格の生涯であった。

関連書	『平賀源内』	城福 勇著	吉川弘文館	289.1ヒ	篠崎ほか所蔵
	『本草学者平賀源内』	土井 康弘著	講談社	289.1ヒ	篠崎ほか所蔵
	『天才の勉強術』	木原 武一著	新潮社	280キ	篠崎ほか所蔵



### スタッフのセレクション

篠崎図書館で働くスタッフが選んだおすすめ本を紹介します。

『アルジャーノンに花束を』	ダニエル・キイス著	早川書房	B933キ	篠崎ほか所蔵
『心の鏡』	ダニエル・キイス著	早川書房	B933キ	篠崎ほか所蔵

この小説は胸の深い所に残り、忘れられない特別な作品です。

主人公チャーリーは精神に障がいがあり32歳になっても幼児のような知能しかありませんが、純粋無垢で温かい心の持ち主です。彼は人と共に生きていきたい、心を通い合わせたい、自分を好きになって欲しいという非常に人間らしい感情を持っていました。そこで彼は、友達のように賢くなりたいと思い脳手術を受けることにしました。手術は成功し、先に動物実験を受けたねずみのアルジャーノンと同様に驚くべき知能を持ちました。しかし、この手術には欠陥があったのです。

本書はチャーリーが語る手術の“経過報告”として綴られています。冒頭のたどたどしい文章から言葉使いが変化していきます、知能や心理の変化がわかります。

チャーリーは知能が高くなることにより次々と記憶が蘇ってきます。自分が蔑まれていたこと、酷い仕打ちを受けていた

こと、嘲笑されていたことが理解できずに笑っていたという事実を知り苦悩します。この作品はチャーリーの視点から描かれているので、私自身も同じ視点で見たような感覚になり、そんな彼の苦悩や葛藤など様々な感情と一緒に味わうことができました。

過酷な運命に翻弄され、悲しく切ない結末を迎えるのですが、それでもなお彼は元からの優しい心を失ってはいませんでした。彼のラストの言葉に胸を揺さぶられます。清らかな人間愛や、人が生きていくのに一番大切な事は知能ではないというメッセージをチャーリーから手渡されたような思いがし、読み終えたあと感動で胸がいっぱいになりました。

この小説は中編小説として発表された後、長編小説に改作されました。私は心の動きが細やかに描かれている長編の方が胸にせまるものがありましたが、皆さんはどのように感じるでしょうか。是非両方読み比べてみて下さい。

### 編集後記

今年の目標は「二重あごの解消(そして腹筋を割る)」です(風雲ふわふわ丸) / 今年の目標は「家事力をつける」です(かき氷職人) / 今年の目標は「今までやったことのない事をする」です(しろやぎ) / 今年の目標は「まめに動く」です(まゆげ)

編集・発行: 江戸川区立篠崎図書館  
住所: 〒133-0061

江戸川区篠崎町7-20-19 篠崎文化プラザ内  
TEL: 03-3670-9102

[しのぎ文化プラザHP]内篠崎図書館ページ  
<http://www.shinozaki-bunkaplaza.com/library/>